美濃

小島信夫

平凡社

美濃

平凡社

美濃（みの）　定価一、四〇〇円
一九八一年五月十二日　初版第一刷発行

著者――小島信夫（こじまのぶお）
発行者――下中邦彦
発行所――株式会社平凡社
東京都千代田区四番町四番地一
郵便番号一〇二一　振替・東京八―二九六三九
電話（〇三）二六五―〇四五一（大代表）
印刷――東洋印刷株式会社
製本――株式会社石津製本所

© 小島信夫　1981　Printed in Japan
製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい（送料は小社負担）

美濃

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

美濃　目次

ルーツ前書(一) 7
ルーツ前書(二) 27
モンマルトルの丘 51
ルーツ前書(三) 67
ルーツ前書(四) 91
ルーツ前書(五) 109
美濃(六) 131

美濃（七）　153
美濃（八）　173
美濃（九）　197
美濃（十）　219
美濃（十一）　233
美濃（十二）　259
あとがき　318

装幀　山崎　登

ルーツ　前書（一）

昭和五十二年九月一日

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

しばらく前から、小説家である私に、年譜が必要になってきた。履歴書の場合とおなじで、自分のことは自分がいちばんよく知っている。それだから、といってもいいが、最初は本人である私が、顔をしかめながら書いていた。もちろん作りごともまぜてはいる。といってもそれは愉しみというような性質のものではない。

私は、もともとそうでないことはないが、やがて横着になった。先輩の真似をした。私は郷里の、私よりは十歳ばかり年下の篠田賢作に、この仕事を頼むようになり、私は自分のやるべきことを彼に任せた。私はどんなにホッとしたことだろう。私はすっかり下駄をあずけた気分になった。篠田賢作の苦労と愉しみがはじまったといってもいい。

私はその頃ふとしたことがきっかけで評伝というものを書きはじめていた関係上、篠田は私にいったようである。

「ぼくはいつか、あなたの評伝を書きますからね」

「ぼくは書かれるほどのことはないよ」

「いいや、きっと書きますよ」

私はお茶をにごしてそれ以上はいわなかった。

私はこれから何も一生契約をかわしたわけではないが、もし私がほかの誰かに「一つ私の年譜を」と依頼したとしたら、たとえ出版社を通じての依頼であっても、妻以外の女性のところに泊り、歓談しながら朝食をとっているのと同様だ。

篠田は私に今後浮気はぜったい許しませんからね、と迫ったわけではない。そんなことは問題にしていないか、あるいは、私の浮気を想像さえもしていないかもしれない。こういう前置きを述べることさえ、彼には申しわけないくらいだ。

しかし私が彼に下駄をあずけた以上は、篠田は本気になって私のことを問題にせねばならん。したがって、今後も過去の歴史についても、自分にだけはうそをつくことをしてもらいたくない。もしうそをつくようなときには、あなたが自分の口からそういったということを、私にほのめかしておいてもらいたい。それからあなたに関する資料は誰よりも私が一番沢山もつようにならなくてはならない。一等資料は私に提示すべきである。(私はこう書きながら、何か微笑を禁じ得ない。何という愚かなことを書きつづらねばならないのだろう。締切をひかえて)それから……。

あなたは、これから郷里である岐阜においての行動は、私にかくれてなさるべきではない。もしそこであなたが、将来意義のある作品の材料となるようなことをしていたのに、私(篠田)がつんぼ桟敷におかれていたとしたら、みっともないことになる。何故かというと郷里は、私が行動し、彼が認知するというこのひそかな世界においては、私と彼の二人のものだからだ。ほかの誰のものでもない。

もし郷里についてそうならば、私が住んでいる東京においても、そのほかのどこにおいても、私のことは、誰よりも彼が知っている必要がある。そのためには彼は私の情報は眼のつくかぎり

は集めるようにはするが、私自身が、彼、篠田に報告するようにすべきだ。本気になって……。

彼の短かい言葉の意味は、これだけであろうか。そうでないことを、私は知っていた。

私はわが郷里については、短かい小説を二、三書いているばかりだ。島崎藤村が「夜明け前」という、家の歴史というか、自伝というか、傑作をのこしている。作家は晩年に入れば、自伝を書いておいた方がいいし、書くべきである。そこで郷里は彼を認め、そうして文学碑の一つも建てるときに、文章をえらぶ材料もあるのだ。どうせ、そのさいには寄附金あつめで問題が起り、その差配をふるうのは、どうしたって年譜を書き、評伝を書いたか、これから書こうと宣言している篠田である。その問題の処理がやりやすいか、やりにくいかは、自伝にかかわる。博物館を作るとなれば、尚更のことだ。どうして一人で博物館の主となるほどの人物となっていけないのだろう。博物館が出来てどうしていけないのか。郷里の文化の振興に役立つではないか。それに誰も彼も望むのはけっきょく、立身出世ではないか。立身出世をケチな意味にだけとってはいけない。偉大な、というのが気がひけるのなら、傑作を書く人物、というふうにとればよいではないか。傑作を書くのを、どうして恥かしがるのか。それならいったい何のために文学を書くのか。涙の出るほどの問題なのだ。あなたは、このような人間であるべきではないだろうか。そのとき、郷里在住の彼のつづる年譜というものは、迫力をもつことになり、(そうなったら、どうして年譜のみにとどめておけようか)評伝も意味をもつことになる。そうなれば彼は、東京の中央文壇に対して鼻をあかしてやることが出来るし、いくぶんかは郷里に対してもそうである。

篠田は詩人であり、郷里では代表的詩人のひとりであり、東京にも知られておる。小説さえも中央の雑誌にいくつかのったことがあり、その頃NHKか東海テレビの仕事で、岐阜だけだった

か、愛知、三重を含めた三県（何かというと、私の方ではこの三県がコミにされるのである）の文学碑を訪ねある記ふうの番組の一部を担当していた。あるいは、私の記憶ちがいで、グラフィックな雑誌の写真入りの連載記事だったかもしれない。

篠田自身はともかくとして私は以上のようなことに近いことを彼が思ってもおかしくないと感じた。それというのも私は、彼にすっかり下駄をあずけてしまって、楽になろうとしているということを、つまり無責任になろうとしていることを、彼もまた察しているらしいと思ったからだ。

年譜の作成の目的ということをめぐって、私自身の挙措進退について彼に下駄をあずけただけではない。何もかも、私の仕事のことまで彼に委ねてしまおうとしていると思っている気配がある。彼に任しておけば大丈夫だ。悪いようにはしまい。私の友人であり、同郷の士であり、彼は何しろ頼まれたのだ。自分の多少とも知っている人物について人物を作るのは、どんなに楽しかろう。私だって自分のことでなければ、年譜という一種の記録文学の中に閉じこめてしまってやりたい！

ああ、私という人物を、私が評伝作家として書くことが出来たら、どんなに生き生きとした文章が書けるだろう。みんなの知らないことを知っている。みんなが想像している以上のことをだ。それに私自身を料理するにはどの手をつかったらいいかも分っている。だから……私が横着になったというのは、この点においてもである。私は過去に物故作家の評伝を書いてきた。そのとき私は自分にあつかわれている作家を羨んできた。こんなにかゆいところまで手をのばしてもらえるこの作家はどんなに幸せだろう。といっても遺族の中には手紙をよこして、傷つけるものだ、という趣旨のことが書かれてあることがあった。そのとき私は実に腹が立った。事情は分ってい

るから仕方がないと思って、ていねいな詫びの手紙をすぐ送った。

私が篠田の部屋で尊大とも見える顔つきをして坐っていたのは、いくらかは、この腹いせがあったのかもしれない。私は、もちろんよく書いたという意味ではないけれども、実質的にサーヴィスをしてきた。こんどは私がされてもいい。そのためには、わが郷里の士が先ず、そのよしみで私のことを扱ってどうして悪かろう。

私の考えでは、一般に年譜作成者は、生存中であるなら作家本人を見るに当って、きっと独特の眼つきをする。私は篠田の書斎で彼と対峙しながら思った。私が長々と書いてしまったのも、ほんとうは、私がつきあってから、はじめて見たといっていいような眼つきをおぼえているからだ。

もともと篠田（この姓は、私の姓と同じように私の郷里では非常に多い）は私が子供の頃とか戦後しばらく郷里に住んでいた頃に活字にしたものを集めていた。それから私が自分で年譜の中に書きこんでいたり、うかれた気分でいるときについ回顧気分にひたって口にした作品で、私が持っていたものは、私からとりあげていた。作者本人は、いとおしんで大事にしているかと思うと急に邪慳にあつかうのが、旧作の運命だ。戦後はじめて稿料というものをもらったある作品ののった雑誌は、近代文学館にもなくて、山形か秋田の古本屋の古書目録にあった。それを彼はとりよせた。苦労の末、手に入れた実物をみせられたとき、私はどんなに気恥かしく思ったことであろう。私がしまっていたら、彼がそんな手数をかけることはなかったのだ。そんなことを語りだしたらきりがない。何枚あっても足りゃしない。しかし、まあ序でだから書きつづけることを許されよ。どうせ、私は二十五枚か三十枚書く時間しか残っていない。私の書こうとしていた話

にとどかぬうちに、筆をおかねばなるまい。今では遺憾ながら、こういう悪いくせが趣味にさえなったとみえる。私がしまっていたら、彼はわざわざ苦労することはなかったであろう。私が大切にしまいこんでいたとしたら、苦労することもなかったし、金もかからなかった。その代り私への手紙の中でそのことにふれることもなかったし、待ちかまえていたように私の前へ、罪の子をつきつけるように、礼儀正しく雑誌の天地が私の方からみて正しい位置にあるように置いてみせるときの、彼の喜びというものもあり得なかったであろう。もともと彼が私にいつでもとっちめることが出来るといったユトリを見せるのは、そういうときだ。そのうえ当然ながら、彼は心にくく諧謔をさえたのしんでいるのだ。その根柢にあるのは、発見した喜びである。喜びは誰に示すよりも、私に示すのが最も値打があり、報われる。私の過去の作品が意義のあるものであるとか、ないとか、いうことは、そもそも問題じゃあない。すでに問題のあり場所がちがうのだ。それに価値など誰がきめるのだ。当の男が眼の前にいるのだ。価値はどこからでも湧いてくる。こいつが書いたのではないか。郷里で。あるいは郷里から東京へ出て行こうとして、東京の近くの田舎へひと先ず住みついた頃に。そこには郷里がモデルになっており、主人公である作者に似た人物は、若々しく、その筆つきも同様に若々しい。それに人間は住むための一部屋とせめて一週間でも食う物があれば、それだけで幸福であり、生きているだけで幸福であると思っている人々ばかりじゃないか。

彼は大工の棟梁である父親の作った家の一室を書斎にしている。その書斎に私が彼と向かいあって坐っているのは、紹介ずみである。というより、まだ私はそのことしか、話していなかったといった方がいい。やはり父親の手による書架には、日本中の古本屋から集められた彼の好みの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com